The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞阿部泰郎著『湯屋の皇后』『聖者の推参』
Author(s)	中川, 真弓
Citation	語文. 2002, 78, p. 58-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69006
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

阿部泰郎著『湯屋の皇后』『聖者の推参』

中川真弓

阿部泰郎氏が一連の論考をまとめられた近著『聖者の推参　中世の声とヲコなるもの』は、すでに発表された旧稿を改稿増補し、さらに新稿を加えての編集で、以下の十章から成る。

序章「中世の声」、第一章「声の芸能史」、第二章「声わざ人の系譜」、第三章「推参考」、第四章「中世寺社の宗教と芸能（南都篇・北嶺篇）」、第五章「霊地荘厳の声」、第六章「熊野考」、第七章「笑いの芸能史」、第八章「ヲコ人の系譜」、終章「文覚私註」

本書以前に上梓された『湯屋の皇后　中世の性と聖なるもの』において、氏は、禁制や結界を侵犯し越境しようとする女人の物語を通じて、中世的な〈聖なるもの〉が顕現する形態を一貫して示された。今回の著書はそれに続くもので、収められた論考には、前書の初出一覧で掲げられていた数多くの関連論文のうち数篇も含まれている。そして、新たなテーマのもと、前書とは別の角度から中世を照射し、相互に補完しあう内容となっている。氏ご自身、本書の中で両書の関係を次のように述べられている。「『聖者の推参』は、前著『湯屋の皇后』の姉妹篇というべき一具の書物である。前著において、〈性〉こそが喚びおこす〈聖なるもの〉とは何か、を一貫して追い求めた、その過程で立ち顕れた境界の彼方へ越境しようとする人間のありかたとしての「推参」は、本書において正面から押し出される主題となった。」（「あとがき」四一九頁）

第三章「推参考」は、その「推参」について正面から取り上げる。本章は、本誌第五十三・五十四輯合併号（一九九〇年三月）に発表された同名論文を礎稿とするもの。日記等の記録語として用いられた「推参」という語の生成の問題を含め、物語や芸能の世界に見られる「推参」の様相を明らかにしている。さらに、「推参」という営為の中にその人間のあり方を見ようとする氏のまなざしが窺えよう。

第一、二章では、神仏と人との間を介する「声」の機能について考察がなされている。同じく第四、五章でも、宗教的・儀礼的な場における託宣や芸能の中の「声」に、〈聖なるもの〉との交信を読み解く。続く第六章「熊野考」では、具体的に霊地としての熊野をめぐる諸相を探る。第七、八章では、「声」の位相の一つである「笑い」の芸能性や、それを喚起する「ヲコ」について述べ、その存在が王権の秩序や体制を可視化し、同時にゆさぶるはたらきを有していること、また、彼自身が境界を体現していることを示唆する。

終章「文覚私註」は、本書書き下ろし。文覚上人が後白河院の御所であった法住寺殿へ「推参」した事件から書き起こし、史実と物語の両面で様々に語られた文覚像に迫る、著者渾身の一篇である。本著で論じられてきた〈声〉と〈ヲコ〉のモティーフをあたかも体現するかのような文覚像は、終章としてふさわしいものであろう。

文献資料の博捜と中世全体を俯瞰する視野に支えられ、本書自体が様々な領域を越境してみせる。なお、豊富な図版とそれに施された脚注は、本書の内容を一層興味深いものとしている。

（『湯屋の皇后』名古屋大学出版会、一九九八年七月発行、四〇四頁、本体価格三八〇〇円／『聖者の推参』名古屋大学出版会、二〇〇一

年一一月発行、四三七頁、本体価格四二〇〇円）

――本学大学院博士後期課程――